

## 第4回御前崎市学校再編検討委員会会議録

日時 令和4年3月14日（月）午前9時30分開会  
場所 御前崎市役所 3階 301会議室

- 1 開 会
- 2 教育長あいさつ
- 3 【テーマ】学校に施設として必要な機能について
  - ・個人意見発表
  - ・グループワーク（望ましい1クラスの人数の下限值についても話し合う）
- 4 閉 会

第4回御前崎市学校再編検討委員会 出席者及び欠席者

御前崎市学校再編検討委員 9名

御前崎市教育委員会教育長 河原崎 全

御前崎市教育委員会事務局

教 育 部 長 長尾詔司

教 育 総 務 課 長 高田和幸

学 校 教 育 課 長 鈴木秀和

学校教育課指導主事 澤入朋美

学校教育課指導主事 澤入基裕

教 育 総 務 課 係 長 川村美穂

教 育 総 務 課 係 長 坂本浩長

欠席者 御前崎市学校再編検討委員 3名

## 1 開 会

○司会（教育総務課長 高田和幸） ただいまから、第4回御前崎市学校再編検討委員会を始めます。最初に互礼を交わしますので御起立ください。お願いします。

[相互に礼]

○司会（教育総務課長 高田和幸） お子さんが緊急で病院に行かなくてはいけない用事がある、お休みの方がいらっしゃるが、今日はこのメンバーで進めていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは最初に教育長、挨拶をお願いします。

## 2 教育長あいさつ

○教育長（河原崎 全） 改めましておはようございます。年度末の大変お忙しい中、週初めの早朝よりお集まりいただきましてありがとうございます。ここ数日、急に暖かくなって、自分の家のことなのですけれども、昨日は木蓮が急にぱあっと咲き出したり、じゃがいもを植えておいたものが地中から芽を出し始めたりということで、本当に季節が動き始めたなという気がしています。園・学校のほうも、今週を中心に卒園式、卒業式が予定されていまして、御前崎こども園が一足早く、先週土曜日12日に卒園式が行われました。今週は、水、木、金に市内の公立の園・学校で卒園式、卒業式が行われる予定です。コロナがなかなか収まらず、先々週あたり園の中で感染する方が結構いたりということで、小学校もすっきりしない状況が続いているものですから、今週の卒園式、卒業式については、無事にみんなが出席できて、挙行できればいいなと思っています。

今日の学校再編検討委員会ですが、第4回ということで、今までテーマごとに話し合いを進めていただきましたが、今日は、その最終回ということになりますので、1つの区切りになるかと思っておりますけれども、また来年度につながるような形でお話し合いをしていただければありがたいなと思っております。よろしく願いいたします。

## 3 テーマ 学校に施設として必要な機能について

- ・ 個人意見発表
- ・ グループワーク

（望ましい1クラスの人数の下限值についても話し合う）

○司会（教育総務課長 高田和幸） ありがとうございます。それでは早速、今日のテーマについて、協議を進めていきたいと思っております。司会を堀井先生よろしくお願いします。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） よろしく願いいたします。

今日は、望ましいクラスの下限值ということで、第2回11月15日の検討会でクラスサイズについて委員の皆様にご意見をいただきました。その段階で、これくらいの規模だったらというようなお話も出てきましたし、改めて議事録を読み返してみると、武井先生はその先を行っていて、いろいろな条件整備、学校の運営の仕方次第、あるいは地方行政の支援の仕方次第で、いろいろな学校の集団の作り方があるのではないかというお話もありました。この下限値について今日は改めてお聞きしたいということで、委員の皆様のお考えをお示しいただいて、更にその後にグループワークということになっています。今日は、予定としてはそれに続いて施設として必要な機

能について、浜岡中学校の建築にかかわった高田課長もここにいらっしゃいますので、高田課長からある意味の問題提起をしていただきながら、皆さんの御意見をいただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

それでは、望ましい数の下限値について御意見をいただければと思います。

○検討委員（校長代表） 学校では、クラスの人数に関しては法にのっとってというか、それで決まってくると解釈をしていますので、下限値についても、今、複式学級というのは本市にはないですけども、2学年合わせて16人以下というところが基準になっていると思います。小笠地域の中でも、10人とか15人とか、そういうクラスでやっている学校は、特に掛川とかにはたくさんあるというのは聞いております。市内の学校で言いますと、学年でまだ20人を切っている学年はないと思います。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 最初にいただいた検討委員会の資料でいうと、現在の御前崎市の小中学校の人数が書いてあるところですね。

○検討委員（校長代表） そうですね。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 人数でいうと今18というのが。

○検討委員（校長代表） 18というのは、結局、学年で36人いるところを2つに分けているので、1クラスが18人ということになります。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 35人学級については、法律でごく最近、定められました。静岡県は35人方式というのを先にやっていたんですけども、今の小中学校の数値を見ていただければと、基本的にはもう35人以下で御前崎市の小中学校はクラス編成をされているというふうになっていると思います。先生は、特に現状で資料に付け加えてお話しすることはないですか。

○検討委員（校長代表） 特には無いです。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。今、複式の話も出ていましたけど、ちょっとこれくらい的人数になってしまうと複式にしたほうがいいのか、あるいは統廃合はなかなか難しいところがあるかと思えますけれども、その辺のことについて御意見をいただければと思います。

では、検討委員Aさんお願いします。

○検討委員A 法律で、35人を超えると2つに分けるということで、18人が最低ということになると思うのですが、ただ、18人以下になってくるとどうなのかなというところで、複式学級にするときにどのくらいかなというところになると思うのですが、2桁くらいいないと1クラスとしての活動が難しいのかなという感じですが、実際よく分からないところはありますけれども、8人、9人となってくると、きっとグループの活気というものが無くなっていくのかなと思ったりするし、ただ、個別指導については少ないほどいいかなと思うし、個別指導が一番いいということになりますけれども、クラスの活動意欲とか、エネルギーなどところを考えると、最低10人くらいなのかなみたいな感じはします。以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。次の委員をお願いします。

○検討委員B 今、Aさんが申し上げたように似たような考えしか持っていないのですけれども、私どもは人数が多いところで育ちまして、今の小学校とか中学校はその5分の1ぐらいの感じになって勉強しているよという話ですので、まあ、10人か、15人まででしょうね。それ以下になったら複式学級のほうがいいのではないですか。それから、複式学級については、私ども情報がありませんので、あんまり。複式学級にしたらこういういいことがあるよとか、そうでないこともあるよとか、一緒に勉強したら学年を超えた交流ができて、学ぶことも必要だと思うのだけれども、人と人の付き合いの中で気を使ったり、5年生が4年生の面倒を見たりとか、4年生が5年生を見て私もあんなったほうがいいなとか、昔の触れ合いみたいな感じの中で勉強ができていったらいいと私は思うのですが、なかなか知識を詰め込まなくてはいけないような今の時代だから、大変だと思うのですけれども。今の子どもたちを見ていると、外で遊んでいる子たちはたくさんいないし、趣味もなくてかわいそうに思うのだけれどもね。趣味ってなんだというのがわからないのかな。だから、自然の中で遊ぶということは、どっちかという大人になってからやって、小さいときに体で覚えることがないものだから、施設に必要なものというけれど、いろいろな実験とかね、規制された中でないこと、心を作るような教育を僕らはやってほしい。でないロボットになってしまいますよ、みんな。すみませんそんな具合です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。今のところは、複式学級はありませんけど、複式学級については、平成27年の1月に出されている文科省の手引きで、複式学級の現状とか課題とか分析がされています。複式学級も人数が少なくなったらやむなしという御意見もありました。皆さんの御意見をいただいたうえで、武井先生に御意見等をいただこうと思います。次の委員をお願いします。

○検討委員C 少ない人数というのが、ちょっと想像がつかなくて、すごく難しいのですが、やはり集団生活の中でいろいろなことを学び取ったりしてほしいなとか、すごく学校に期待があるので、やっぱりあまり少ないと、1クラスが10人とかというのは、ちょっと自分には想像がつかなくて、人とかかわりとかを学校でいろいろ経験してほしいなと思うと、女の子だとだいたい3人くらいでグループになるかなと。そうすると、それが2つだともめやすいから、3つは欲しいのかなと思うと、女の子が1クラスに9人かな。そうすると男の子も1クラスに9人欲しいかな。やっぱり20人ぐらいいるといいかなと、そんなことを家で考えました。以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 武井委員が11月15日の最後、まとめの時にそういう話をしているのですよね。女子が10名、男子が10名で、だいたい20人くらいかなと。あれは、理論的根拠が何かあるのですか。

○検討委員（静岡大学教授 武井敦史） 手引きのほうには少しあれですが、ただ理論的というか、いくつか委員会を私はやってきたので、トータルで聞くと、小学校だと100人を切り始めたくらいから保護者が異動しはじめるのですよね。動き始めるというのは、それは多分データはないのだけれども、ただ感覚としてそういうことがあって、学校の先生方も従来の枠組みを前提にしていると、やっぱり最適値は多分1クラス20人ぐらいで、複数学級あるのが望ましいということだと思うのですよね。そこは分かっているのですが。感覚としては大体そんなところで、多

分、皆さんの感覚と、学校の先生に聞いても保護者に聞いても差がないというのが、私の実感です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 次の委員お願いします。

○検討委員D 数字的なことだけ見れば、校長代表が言ってくれたのを、私は知らなかったのですが、法があるということを知らなくて、何人以上ですか。35人以上だったらクラスを分けるということなのですか。そうすると、逆に下限はないということなのですか。

○検討委員（校長代表） 先ほど言いましたけれども、2学年で16人以下になると複式にするという決まりがあります。

○検討委員D そういう法があるのであれば、それを定めた根拠があるはずじゃないですか。こういう理由があるから、それを決めましたよ。それがあつたら、もうそれに従うしかないじゃんとなるのか、いやいや、これからの時代に沿うようにもちろん変えるものは変えていかななくてはいけないとか、何かそういうことも、今、考えてしまって、じゃあこれを議論しても、こういう法があるから、それはもう論外ですよというふうになんか突っぱねられてしまうのかとか、何かちょっとそういうことも考えながらも、でも、自分の意見として考えれば、さっき検討委員Bさんが言ってくれた、例えば心をつくるとか育むとか、やっぱりすごく抽象的ですけど、めちゃくちゃ大事なことで、さっきちょっと言ったクラスの男の子と女の子のバランスとか、人数に対して、例えば2クラス下限値という数字はちょっと置いておいて、2クラス作ることができるのにわざわざ1クラスにするとか、1つ例を挙げると例えば運動会とかをやったときに、1クラスしかない例えば赤組白組を作るときに1クラスの中で分けるとかいうことではなくて、もし、元々2クラスあれば1組が赤組で2組が白組ですとか、そういった分けがあらかじめできるとか。今、多分、北小とかだと分けざるを得ない。何々ちゃんは白組なのに、私は赤組のみみたいな、そういうものが出てしまうみたいな。そういう部分でも、差別ではないのですけれど、分けがいきなり発生してしまふという部分も出てしまふし。元々もう組が分かれていますのであれば仕方がないというか、ある意味クラス分けというような楽しみも我々のときはありましたしね。1、2年は一緒に、3、4年になると変わったり、担任の先生も変わったり。そういう変化もあると思うし、そういうクラスの中で育てていくということを考えれば、下限の数字とか言われてしまうと難しいのですけれども、複数クラスあつたほうがいいのかないのかというのは感じました。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 1学年複数クラスということですね。

○検討委員D はい。というのは今ちょっと思いましたね。  
機能の話はあとでいいのですか。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 今でもいいですよ。

○検討委員D 機能というのを前回言われて、何かぼんやりした感じで、どういう意味で捉えたらいいのかなと思いました。施設の機能って何かということをもすごく考えました。確かに浜中ができて我々の時代からしたら多分、相当変わっていて、いろいろなものができたり、すごく便利になったりしているのだろうなと思ったのですけれども、そういう単純に自分たちがあつたら

いいなと思うような、ドラえものの道具じゃないですけど、そういうものがくっついてくることを要求されているのかなと考えました。タブレット等も今、学校で普及してきているので、書物をおいてある部屋とか、そういうものがいらなくなって、逆に何か1つのもので全部の機能ができてしまうみたいな、もうランドセルもいらぬ靴もいらぬとか、何かそういう話になっていってしまうのかな、それが機能の話につながるのかなと思いました。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。この辺、教育長がお詳しいのかもしれませんが。あとからまたお話が出るかもしれませんが。浜岡中学校の図書館も今はやっぱりICTという時代とともに変わってきているので、昔の図書館のイメージはなかったですね、何度か伺いましたけど。その辺のいわゆる施設あるいはGIGAスクールですね。そういうものの中で、今までの集団の捉え方とちょっと変わってくるというか、何か学習の方法が変わってくる中で、集団の捉え方も変わってくるころはあると思います。多分、今日、そういうことも含めて御意見をいただきたいということなのですよ、高田課長。

○教育総務課長（高田和幸） そうですね。機能の話はまた後半にしたほうが、論点がずれないと思います。下限値の話をお願いします。

○教育総務課長（高田和幸） それで、今、おっしゃった法律の関係がありますけど、今は法律云々の話をしたいのではなくて、今から子どもがどんどん減っていきますよ。御前崎市で例えば今20人くらい欲しいとなったときに、人口を見ていくと大体いつ20人を切るのかが分かります。そうすると、この20人のラインで学校を統合するとか、新しい学校をつくりましょうとかいうラインを御前崎市が決めればいいのか。その参考値が欲しいと思っています。それで10人だというなら、10人になったときに2つの学校を一緒にしましょうとか、1つの学校が10人になったのでこちらへ合併しましょうとかというラインがつくれるので。複式学級云々という話がありますが、市としては、今、言ったように異世代交流というのはあつてしかるべきで、いいことなのかもしれませんが、やっぱり学力というのを見ると、こちらは足し算をやっているけれど、こちらは掛け算をやっていますみたいな話になってしまうと、やっぱり先生1人で2つの学年を見るというのは大変なことです。とすると、やっぱり複式学級にならないような人数構成をしていくには、どのタイミングで合併を考えていったらいいのか。ただ法律でいうように8人になったら、じゃあ一緒にしましょうみたいな話では、やっぱり違うのかなと思うので、皆さんが考えているこのぐらいの人数、女子が9人、男子が9人、18人ぐらいだねという話があるのなら、その辺を市としては目安と考えていきたいと思います。参考になればいいなというところで、今回、この話を聞いています。ですので、今回は、ちょっと前半は下限値が何人くらい必要だねという話にさせていただきたいかなと思います。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） そういう点では、先ほどB委員がおっしゃってくださったように複式もありかなという意見、あるいは複式は無いでしょうという意見も、ざつぱらんに出していただければいいですね。D委員の後半のところに関しては、そういう視点を考えていくとまたいろいろ考え方が変わるのかなとも思いますけれど、改めて後半のほうでお願いしたいと思います。ありがとうございました。

それでは、次の委員、お願いします。

○検討委員E そうですね、やっぱり私たちの子どもの頃は、本当に40人以上は当たり前だったので、もう20人でも少ないかなと思うのですけれども、今の現状を考えると当たり前とも言って

いられないので。今、課長さんが言っていたように、これから少なくなってくるのは事実なので、そうなったときに学年を一緒にするよりも、小学校を統合するほうがいいかなと思いますね。そのときの人数は、皆さんが思っているように 20 人を切るとちょっと可哀想かなという感じもして、友達もたくさんいたほうがいいので、ちょっと通うのには大変になるかもしれないのですけれども、学校の統合を考えたほうがいいのかと個人的には思います。以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。それでは、御欠席の委員がいるので、次の委員、お願いします。

○検討委員F クラス人数はちょっと難しいのですが、ふわっと考えたらやはり 10 人ぐらいは最低欲しいのかなとちょっと思ったところなのですけれど。知り合いにすごく人数が少ない小学校に通っていたという人がいて、その人にその話を聞くと、少ないなら少ないなりに何かみんな仲良くていいなど、話を聞くと思うこともあるのですが、やっぱり学年に、そうですね、10 人以下になったら、違う学年の子とも仲良くなれるのでしょうけれど、やっぱり同世代の子と仲良くなってグループを作ると考えると、10 人ぐらいがいいのかなと思いました。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。1クラスの最低・下限値というのは、難しいといえれば難しいですね。1クラス 10 人というお話もありましたし、男女の構成を考えると 20 人というお話もありましたし、それからやっぱり運動会も含めて紅白で分かれるときには 1 学年 2 クラスあったほうがいいのではないかというお話もありました。また、法律は関係無いということでありましたけれど、2 学年で 16 人を切ったら複式学級という、やはり多様な論点があるなと思いました。ここで武井先生に御意見を伺って、そのあとグループワークでいかがでしょう。

○検討委員（静岡大学教授 武井敦史） それは当然下限値というものはあるかもしれないけれども、じゃあそれがあるから何だと言うのと、これは、統廃合していくとなると、統廃合を実際に考えているとなると、これはシビアな問題として、ここを切ったらこの学校を減らそうということは有り得るのだけれども、それは実は複合的な要因が複雑に絡み合ってくる問題で、前回、通学時間の問題がありましたけれども、例えば最適数が 16 とか 20 とかであるとして、それを切ったら一緒にして、1 時間かけて行くかという、そうでは無くて、それこそ距離の問題からしたら、だったらまだ別々にしたらいいということもあるし、それからあと地域性の問題も当然ありますよね。その地域にとったら学校が唯一の中心で、子どもの教育からしたら、もうそれは一緒になったほうが人数の面からはいいのかもしれないのだけれども、もう一方で、地域の中で子どもが育つことを考えたら、そこに学校が無くなってしまったら中核が無くなってしまうということもある。だから、はっきり言って、学校を統合するか否かという問題は、人数だけで単純に割り切れることではないということでもまず 1 点踏まえておかななくてはならないということだと思うのです。それから、もう 1 つ考えておかななくてはならないのが、今の学校の先生が、一斉授業でクラスを指導しなくてはならないという前提で考える必要は、もはや無いということですね。これからの時代特に。静岡市に井川という地域があるのを御存知だと思うのですけれども、あそこですばらく小中一貫教育をするというので入ったことがあります。あそこは小中合わせて 12 人です。だけど、12 人になれば、12 人になったなりの教育がやはりあるのです。だから、私はそこを見ていて、子どもたちが決定的に教育の権利が侵害されているとは思わなかったです。ベストかどうかについては、もっといたほうがベストに決まっていますけれども、人数が少なく

なれば、まずやり始めるのは、例えば学年の縦の交流ですよね。それで解消できない、例えば音楽などは、3年生と4年生と一緒に音楽の授業を受けたとしても、大した問題はないです。だけど、例えば算数のように積み上げの教科で同じようにしかできないと、これは問題なのだけれども、でも、その部分は例えばA Iドリルのようなものを使用して、個別最適化していくことができるので、それを1人1人がやりながら先生が個別に教えていくことができるので、対応の仕方というのは非常にバリエーションがあるのだということです。それから、学年を2つ合わせても人間の関係の幅が狭くなったら、今度は他校と、例えば井川なんかでやっているのは、バスで子どもが定期的に移動して、子どもたちを合わせた教育活動を一部取り入れる。オンラインをすれば、オンラインも十分使える。それから、地域ともつながることができるということで、今ある教育を絶対視して、人数が少なくなったらこれはもうアウトだから統廃合だという結論を導くのは、これは非常に危険なことだと思います。そのうえで、ぜひ考えたいことは、そうしたこれからの社会変化を見越したときに、当然、オンラインの形は今はまだ1人1人の子どもの表情がわからないとか、ときどきフリーズするとか、そういう問題はあるのだけれども、そういう問題はおそらくあと1、2年のうちにはほとんど解消されているだろうという前提を想像することができて、先ほど複式の話が出ましたけれど、これは複式にきなさいと法律で決まっているわけではないのです。そうではなくて、学校の先生の、教員の配置が決まっているのです。だから例えば人数が減ってきて2学年で10人しかいませんよと、そうしたら、そこに教員を1人しか付けられませんよということが措置要件として決まっているということです。それを例えば市がお金をプラスアルファで出して、2人にするのは、これはできるのです。だから例えばそのところでフルに正規採用の1人を置く代わりに講師を2人置いて、その分、複式を解消していこうとか、それから、いくつかの学校をまたいで先生が移動するような形にするとか、相当程度のこれは工夫が可能です。ですから、先ほど高田課長が言われたことに、もう1回引き付けて、どういう議論をしておいたらそれが御前崎のこれからの学校、するならば再編をするときに役立つかと考えたときに、最大限これからの社会変化を見越したときに、どのような学校の教育のあり方が可能なのかというところのイメージは膨らませておく。そのイメージを基にして、それでもこのくらいのクラスはあったほうがいいねというような話が出てくるとするのが筋であって、逆にこれはもう下限だからこの人数を切ったらという考え方をするのは、おそらくこれからの御前崎にとってそれほど生産的ではない可能性があると思うのです。だから、そういうふうに教育の変化というのを、これから堀井さんが組織制度について紹介してくれると思いますけれども、そんなふうに考えながら次の教育のあり方というのを考えていったらいいなというふうに思うのですよね。こんなことも人数が減ったら減ったで、教師と生徒の関係からいったら、教師の割合がすごく高くなるので、その分厚い指導が受けられるという考え方もできるはずなので、そうした中で人数が減っていったときにどういったら一番いい教育が受けられるかという、シンプルにその部分で考えるのが一番これはいいと思うのですよね。その中で、下限というのを定めたほうがいいのかというなら、そのときは定めて学校の配置自体を考えようということ議論したらいいと考えられたらいいと思いますので、そんな前提を持ちながら、これからの議論をしていくのがいいと私は思います。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 下限値というのは、クラスサイズの問題でもう少し聞いたかったということがあって今日のテーマになりましたが、今、武井先生がおっしゃるように、これからの御前崎の教育をどうするのか、先ほどからあった心の問題とか、出てきたと思うのですけれども、そういう視点を踏まえて、これくらいの人数が必要だろうけれども、こういうふうにやったらいいのではないかと、この辺はこういうふうにやったらいいのではないかと数値にど



れくらい結びつくか分かりませんが、その辺をグループワークでぎっくばらんにお話しただいて、それをグループごと、まとめて出していただく形にできればと思います。数値で何名というのは、これは出てくるに越したことはないのしょうけれども、どういう教育をしたいのか、あるいはこういうことができるのではないかと、正にこれからの御前崎の教育ですよね。その辺の問題を、数値を絡めてお話しただければと思います。うまくまとまらないかもしれませんが、グループワークの中でいろいろな意見が出てくるとと思いますので、今から 20 分、10 時 30 分を目安にして、各グループで話し合いをしたいと思います。

○司会（教育総務課長 高田和幸） はい。ありがとうございます。それでは、またいつものように、A 班、B 班、C 班という形でグループになっていただいて、少し話をしたいと思います。よろしくをお願いします。

#### [グループワーク] 20 分

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） まだグループワークの途中かもしれませんが、一応時間ということで、グループから出てきたお話を発表していただければと思います。順番は、では A グループから。

○A グループ（学校教育課指導主事 澤入基裕） では A グループで出たことについて報告をさせていただきます。御前崎市としてどのような教育をしていきたいのかというビジョンは、やはり必要になるのかなという話は出てきました。どうしても人数の下限を考えてしまうと、今の教育をどう維持するかというところに目が行きがちで、そうすると教育というのはなかなか変化していかないということもあるのかなと。ただ、人数に対してどれだけいい教育を提供していくかというところを考えると、いろいろな工夫ができたりとかもできるのではないかと。今、オンラインという話も出てきましたが、つい先日、御前崎中学校が掛川東中学校の子どもたちとオンラインでつながって、1 つのテーマでディベートをしたということがありました。そういうことを考えるとやっぱり、北小と東小とか、東小と第一小、第一小と北小というふうに、合同でオンラインでの授業という工夫も今後できていくかなと。学校でいえば逆オンラインというか、先生が自宅にいながら、子どもたちが教室で授業というの、今、やっているところもあたりしながら、いろいろな可能性としてはあるのかなというのは出てきました。あとは、子どもたちにどんな力を身につけさせたいのかというところで、社会性を育てていきたいとか、多様性を認め合った中で成長していってもらいたいということを考えると、やっぱり 1 つの学年に複数の学級があったほうがいいのではないかとかということもありますし、ただやはり小さな学校の子どもたちは、大きな学校の子どもたちと一緒にになったときに圧倒されてしまうということも事実としてあるのかな。ただ、御前崎市については、中学校で一緒になることを考えると、小学校で無理に考えなくても、中学校でそういう力を身につけさせていくということもできるのではないかと話も出てきました。あとは、御前崎はスクラムという考え方があって、スクラムの良さとして、学校のそれぞれの多様性、学校としての多様性というのを認め合いながら、それぞれの良さを感じたり得たりしながらやっていく。逆に違いがあることによって、いい教育がよりできていっているという現実があるので、今の大きな学校があり、小さな学校があるということは、すごく逆にいいことになっているのではないかと、そういう違いは大事なのかなということも出てきました。あとは、現実的な問題としては、御前崎中の地頭方小の子どもたちが、もう 2030 年には抜けてしまう可能性が出ているというところで、そこに対して考えていく必要があるのではないかと

ことはやはり出てきました。以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。それでは、Bグループの発表をお願いします。

○Bグループ（教育総務課係長 坂本浩長） Bグループです。最後、静大の武井先生が提言というか、教えてくれたように、ICT含めて学校の施設、それから学習そのものがクラッチポイントに来ているので、どういうものを教育として提供していけるかというのは、複数要因によるいろいろな形があるのでというのは御指摘のとおりなので、その可能性を考えていくと、なかなかこの下限値という問題と折り合いをつけていくのは難しいというのは1つありました。一方、現実に子どもを通わせている父兄等からの意見を言いますと、やはり最初の個人発表に出たように、男女10名ずつの20名の理想値の形の複数学級があることが望まれますが、Bグループについては、市内でも人口の多い地域から出てきている委員なので、いわゆる統廃合という話に発展していった場合に吸収される側の思いというのはなかなか代弁しづらいものがあるなという意見が出ました。ですので、人数でいうと、理想値を持ちながらも複式学級になる形態はあまり望ましくないというふうに考えているので、武井先生曰く、それはイコール複式学級に移行していかないだろうということだと思えるのですけれども、そういう時点で1つ、市としての学校数の見直しという時期にはなるのではないのでしょうかというような意見でした。それから、オンラインと対面授業の印象でいうと、コロナ禍のこの状況もありまして、オンライン授業も実際経験した中で、すごく有効的だなと感じたと同時に、やはり学校に親が求めているのは、いわゆる学習ドリル的なものだけではない面もあるので、オンラインのみとか、オンラインのウェイトがかなり高くなった教育形態への移行は少し抵抗がありますということで、親も子どももそういう実感でしたという意見がでました。それから、人口移動についてですが、今、いわゆる世帯で1軒という、若夫婦で家を建つというのが御前崎市でも見られていますので、そのときにやはり子ども園、それから義務教育の小中学校がこれから何人くらいになるかというのは、どこに建つかという時点で、例えば10人しかいないところをわざわざ選んで1戸建てを立てる親はいないでしょうということで、市内の人口がいる地区に建てますということで、それが他市を選ぶということにならないように、少し御前崎市としても考えていく必要があるかなというふうにグループとして意見が出ました。以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。それでは、Cグループをお願いします。

○Cグループ（教育総務課長 高田和幸） Cグループです。たまたま北子ども園を作ったときの話をさせてもらいました。担当していたので、その時の様子ということで、人数が少なくなってきた、一緒にしなくてはいけないねということで、朝比奈幼稚園と新野幼稚園を一緒にしました。そのときの人数がただ少なくなってきたというだけではなくて、1学年6人しか新野幼稚園にはいなかったわけですが、その6人の男女比が、女の子5人、男の子1人という状態でした。その子たちが来年の年少で入ってきますよ、ではどうしますかという話が出てきたときに、やっぱり合併しないといけないよねという話をさせてもらったということをちょっとお話させていただきました。やっぱり、人数が減っても学校の授業は、今言ったように工夫すればいろいろなことができるのですが、休み時間に女の子5人で男の子は1人しかいない。今、ある検討委員のお子さんが通う園では、18人のうち女の子が3人で男の子が15人という話も聞きましたので、

そういうことを考えると、人数が減ってくるとどうしても偏りが出やすくなる状況にはなってくるのかなという話をさせてもらったところです。ただ、保護者さんの考えとして、感覚の中では1学年10人、1クラス10人を切ったら、やっぱりちょっと少ないよねという感覚的な話。それから、授業みたいなことを考えると、グループ学習というものをどうしても学校では皆さんもやってこられたと思うのですが、やはり1グループ4人くらいはいて、3人だと1人は話をしない子がいたりするので4人くらいのグループを作ったときに、3グループ、もしくは4グループあって、その中でいろいろな意見が出てきて、メンバーが交代しながらグループ学習ができるよというのがやはり楽しいのではないかという話の中で、16人くらいいたらいいよねという話は出ました。ただそれはやり方の問題なのかもしれませんが、保護者さんと地域の方の今までの経験の中で16人くらい欲しいよねという話、それから感覚の中ではやっぱり10人を切ったらちょっと嫌だよねという話の2つになりました。以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。改めて、男女比の問題ですね。それから10人とできてきましたけど、グループ学習ですね。なかなかオンラインだけで補えないこととか、場合によっては「スクラム御前崎」でも補えない部分があるのかもしれないと思って、今伺っていました。ありがとうございます。特にこれはまとめということではないので、御意見を伺ってということによろしいですか。

○司会（教育総務課長 高田和幸） はい。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。そこで続いて、施設として必要な機能という、これは今の下限値の問題にもかかわって、オンラインの問題も出てきましたし、Aグループでは幼小中連携にかかわっている施設とか、そういうものにかかわって出てきた話がありますけれど、ちょっとこれからグループワークをしていただきます。イメージもしづらい部分もあると思いますので、浜岡中学校の改築に携わってこられた高田課長から、どんなイメージで話し合っていたらいいか、その辺をお話いただければと思います。

○教育総務課長（高田和幸） はい。浜岡中学校の改築については、足掛け4年の期間かかりました。その間ずっと課長として仕事に携わらせてもらいました。機能とか施設という書き方をしていますけど、まずさっき言った機能の部分では、オンラインがつながってきますよということになると全館無線LAN対応していきますということでやっています。それはICTの問題であって、備品とっていいのかな。学校の施設というよりはやはり機能、設備という感じになると思うのですが、そういうものは必ず必要かなと思っています。箱ものみたいなもので考えると、前にもちょっと話をしましたけど、通学は、送り迎えみたいなものが、もうちょっと当たり前になってきているというのが事実ありますので、道路で降ろしたり、道路で乗ったりすることがないように、ロータリーは作りました。校内に入れて周りの人たちにも迷惑が掛からないようにということで、送迎用のロータリーが欲しいかなというのと、今、各お宅がほとんど洋式トイレですので、浜岡中学校は全部の便器の数を数えた中で、2つしか和式トイレがありません。1階の男女それぞれに1つあるほかは、全部洋式になっています。洋式のうち、各トイレには必ずウォシュレットが1個以上はあるという仕組みにしています。思春期の中学生ですけど、小学校についても同じく、5、6年生、4年生、3年生も含めてですが、女子の更衣室みたいなものはやっぱり学校に無いので、クラスで男子に出て行ってもらってカーテンを閉めて着替えるようなことを昔はやっていたようですが、浜岡中学校には各学年に2か所ずつ、1クラスが全員入れるよう

な女子の更衣室を作っております。それから、習熟度別授業というのですか、ここまではできている子とできていない子を分けて授業ができるように、そういうスペースも一応考えて、いわゆる多目的スペースというものを学年の中に2クラス分くらい作っております。それから、いろいろな子どもが通学してくるので、浜岡中学校にはいわゆるバリアフリーということを念頭に考えて、エレベーターを作っております。4階建てですので、例えば4階で子どもが倒れました、救急車を呼びます、ストレッチャーで運びますとあって、ストレッチャーが入れないのでは意味がないので、ストレッチャーサイズ、よく病院にあるような大きなエレベーターを配備した中学校になっています。そういった意味では、機能としてはそういうことを考えながら作ってきましたが、これは中学校ですので、今度は小学校と考えると、更に必要なものが増えてくるのかなと思いますし、逆に放課後児童クラブみたいなものが学校に併設されているととってもいいよというような話も出てくるかもしれませんので、そういった保護者さんの目線で、こんなものがあつたらいいよとか、例えば迎えに行くのだったらお総菜屋が隣にあるほうがいいねとか、そういうような考えでもいいと思いますので、そんなことをちょっとお話してもらおうと思います。よろしくをお願いします。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 今の高田課長のお話を伺うと、学校再編の問題の延長線上に各学校のあり方ですね。学校の施設でこういうものがあればいいのではないかとこのころをぜひ御意見をいただきたいということで、こういう施設設備があつたらいいねとか各グループで御意見を出し合って、まとめていただければと思います。そういう方向でよろしいですか。

○司会（教育総務課長 高田和幸） はい。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） それでは、学校施設設備について、今の話の延長線上で考えていただいても結構ですし、ほかのことで考えていただいてもよろしいので、よろしくをお願いします。

[グループワーク] 20分

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。なかなかまとまりにくいところもあつたかもしれませんが、各グループで出てきた意見をお話いただければと思います。それでは、Aグループからお願いします。

○Aグループ（学校教育課指導主事 澤入朋美） まず最初に、学校を小中一貫の学校を作るのか、それとも今あるものをいかしつつ改築していくのかということによっても、いろいろな議論になるのではないかとこの話から始まったのですが、最終的にまとまったのは、可変性のある構造ということでした。今後、60年、70年、使用できるような、いろいろなものに対応できる構造の学校ができるといいなど。時代によって求められる教育も変わってきますので、それに対応できるような構造ができるといいなどというお話でした。例えば、今、とても特別支援学級も増えてきているのですが、通級などにも対応できるような間仕切壁があつて、構造壁を作ってしまうと動かせなくなるので、教室の大きさ等を変えられるような教室とか、あともちろんスロープとかいろいろなバリアフリーも対応していけるといいなど思うのですけれども、あとは、放課後児童クラブも今は学校の中にあつて、一緒に過ごすことのメリットもあるのですが、やっぱりあることによって管理する面で学校の負担もありますので、分離という可変性もあるのではないかと

うことや、あと、部活も今後地域のほうへということもあるので、そちらも分離というところも考えながら、共に協力する面とお任せする面というところで考えてもいいのではないかという話も出ました。それから、私、ちょっと香川県にいたことがあるのですが、その学校は1クラスの小さい学校だったのですが、新校舎を作ってくれました。いずれここは廃校になって、公民館としても使われるようにということで、ちょっと普通の学校と違うような構造になっていたり、あとは島田市湯日の学校でグランピングができる施設に変わったというのもあるので、再利用のことも考えていく必要があるのではないかというお話が出ました。以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。それでは、Bグループお願いします。

○Bグループ（教育総務課係長 坂本浩長） Bグループです。前に発表があったようにまとめていませんので、それぞれ意見を出し合ったという形になります。欲求と同じで、あったらいいねというものは際限がないですし、あるいは先行の事例を見ても、すごくいいなというものもあるのですが、現状の中でこういったものを充実させてもらいたいというものに特化して出しました。列記してありますが、前のグループでも出たように、放課後児童クラブの施設、それから内容の充実をお願いしたいよと。それから、更衣室の例が出たので、女子、それから区分けという意味だけではなくて、同時に男子の更衣室も設置して欲しいと。あるいは、中学校の部活動については、具体的に浜中でしたが、体育館を順番で利用しているので、もう1つ体育館があると大変ありがたいですよという意見も出ました。1つは先ほど例題の中で出た習熟度別クラス、習熟度別学習というものがありましたが、そういうスペースだけでなく、先行している子どもも、少し遅れ気味の子どもも含めて、1つの御前崎型のものができてくるとありがたいかなというような意見も出ました。それから、右側の機能については、今、話題になっていますのでICT関係の意見が多く出まして、配信に絡むICT機器の充実、確実に1人1台のタブレット端末の配架、そうなった後の学校、保護者相互連携の形の実施というものを図っていただきたいというような意見が出ました。それから、施設の中では、通学バスの対応で、浜中の例に出たようにロータリーがあって、いい学校もあるのですが、第一小などの子どもが待っている姿を見ると、同じようにバスが入ってくる、子どもが待っている待機所の充実をお願いしたいというような意見も出ました。それから、部活動について、外部コーチの対応がこれから入ってくる部分が拡大してくる面があるかと思うのですが、出入り口の切り分けというような管理上の問題も少し対応していただけるとありがたいというような意見です。列記となりましたが、発表は以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。それでは、Cグループお願いします。

○Cグループ（教育総務課長 高田和幸） 今まで出ていた意見と同意見のところもありますので、そうではないところだけ発表させていただきます。まず、学校については、安心して子どもを通わせるためには、セキュリティ面の充実というものをお願いしたいということ。それから、保護者が集まってくるときに、駐車場がどうしても無いので確保してもらいたいよということがありました。それから、子どもたちが休み時間に集まったりとか、少人数で勉強したりというような、オープンスペースみたいなものがあるといいねということです。それから、当然、学校が災害時の避難場所ということになりますので、そういった意味では避難場所の組織みたいなものが

明確になるようなものも期待したいということと、ライフラインとして自家発電とか、水道、いわゆるタンクみたいなものもあるといいなというものがありませんでした。体育館に空調を付けてもらいたいというような要望もありました。それから、少し視点が違うのですが、小学校の学用品というのですか、その購入には必ず今でも小銭を袋に入れて集金するという仕組みになっていますが、今の時代なので、カード決済とか電子決済みたいなものも導入してくれると、小銭を集めたり、子どもにお金を預けたりということもないので、そういうようなものがあるといいなと、仕組みとしてあればいいなという意見です。最後に、地域の人が学校に行って、子どもたちのことをどうするのだとかいう話があればいいので、地域の人たちが学校で話し合いができるようなスペース、子どもたちと一緒に学習ができるようなスペースが各学校にあるといいなという話をしました。以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。施設として必要な機能ということで、再編の問題と直接かかわらないかなと思うところもあったかもしれませんが、これからの学校のあり方を、今まで当たり前にあった学校ということを超えて、それからこうあるべきだという視点から離れることで、小規模化とかいろいろ課題を抱えている今の学校教育を更に新しい方向に変えていくものがあるのかなと思ってお話を伺いました。

それでは、11時30分を終了時刻としていますけど、私と武井先生でコメントをという私自身、今日、パワーポイントを作ってきました。武井先生には今日の全体のまとめをお願いしたいと思います。

浜岡中学校の検討委員会にかかわって、かれこれ5、6年になりますけれども、浜岡中学校を作る際に、いろいろな委員の皆様から御意見をいただく一番最初に学校施設を考えるためのについてお話をさせてもらいました。委員の皆様には、これまでの議論を踏まえて報告の段階まで委員の皆様のお意見をいただきたいと思うのですが、一応、ざっくばらんに意見交換をしてきた一番最後のところで今日の会があったと思います。改めて、皆さんからいただいた意見に関わって、今まで当たり前だと思っていた部分を、もう一度、学校施設という視点から捉え直すことで、こういう視点であれば規模が小さくなくてもある程度続いていってもいいのではないかと、今日のお話を伺いながらいろいろ思いをめぐらせました。ちょっと字が小さいですけど、学校施設とは単純に定義しますと、学校は一定の教育水準を確保し、その目的を達成するために必要な物的組織をいう。施設は一般に、土地、建物など大きく固定的な不動産物件を指し、設備はそれよりも比較的小さく、建物に付帯する可動的なものを意味します。小学校の設置基準というのがあるって、学校に備えるべき施設として、教室と図書室と保健室、それから職員室と必要に応じて特別支援学級のための教室という形になっている。それ以外に、その他の施設として、校舎、運動場、体育館。おおまかにこの辺の要素を持ったものが学校施設となります。

20年くらい前に、国立教育政策研究所の人たちと一緒にいったときの写真なのですが、写真だけ見ても分かりにくいと思うのですが、まずは、イギリスの小学校の様子です。「小1プロブレム」という、幼保小接続の高い壁を乗り越えなくてはいけないと言って幼保小の連携が言われるようになったのですが、イギリスは数年前に幼保小連携の調査に行ったときは、「小1プロブレム」はないと言っていました。というのは、小学校に大体こういうレセプションクラスというのがついていて、いわゆる幼稚園みたいなものですね。数年前のデータでは、イギリスの小学校の6割にレセプションクラスがついていて、イギリスは5歳から小学校に行くのですが、3、4歳の子たちがここに入っていて、同じ棟のところに小学校がついていますので、そのままスムーズにやりとりができていますね。更にすごいなと思ったのは、幼稚園、レセプションクラスから小学校へ上がったときに、レセプションクラスの先生が2週間くらいくっつ

くのですよね。それで、子どもの様子を見て、ちょっと問題があるとなったら、小学校の先生とやり取りをする。日本も、連携を意識はしていますが、そこまできちっと支えているところはないのかなと思います。オープンスペースは、建築分野ではいまだに重要視されて、イギリスのこの学校は、これが学校の中なのですけど、教室ごとに学級があるという日本のイメージとはまったく違って、この辺に全部見渡せるところがあって、1つの校舎の中にみんな一緒に子どもたちがいるという感覚なのですね。ごちゃごちゃ一緒にいるということで、大体イギリスの小学校はもともと人数が少ないのですけれども、人数が少ないところの問題もカバーできるのかなと思います。写真が小さいので見にくいかもしれませんが。これがレセプションクラスですね。ここに3、4歳児がいます。

○検討委員D 要するに幼稚園ということですか。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） 幼稚園ですね。イギリスは歴史が古く、いろいろな種類のナーサリースクール、保育所なんかもたくさんあるのですけれども、日本に比べると経済格差が結構あって、スタートカリキュラムというのだけれど、小学校にレセプションクラスを作って、3、4歳からもう無料でレセプションクラスに入れますよ、勉強できますよという仕組みを作っているのですね。幼稚園とかナーサリースクールとか、いろいろな施設は伝統的にあるのですけど、あえて3、4歳は一緒にくっつけてしまおうという流れです。ちなみに、イギリスは、大体小中学校では立派な運動場はありませんので、ハリー・ポッターのような芝生の運動場付き学校はお金持ちの学校ですですね。それでもよく外に出て遊んでいました。

これは、日本はPFIという言い方をしますが、プライベート・ファイナンス・イニシアティブという民間活用で、なるべく民間の力を使って、安くいい学校をつくらうというものです。ハイランズスクールというところで、この学校は、トニー・ブレアが創立式典に来て「これがイギリスの学校だ」と言ったところなのですけれども、民間の費用でいろいろな学校を作って、更に、学校の維持管理を担当する民間企業から雇われている専門家がいますね。このパソコンのモニターを見ながら、学校の安全も全部管理してくれたり、施設も管理してくれたり、日本は補助金の関係でなかなかそういうことができませんけれども、そういう外の人を入れることで、この人はとりあえずそういうパソコンの技術が長けているので、授業なんかにもかかわってもらうような形で教育を充実させるようにしているところです。学校の中で学校のどこが大切なところですかと聞くと、こういうところに案内してくれます。一応小さい舞台みたいなのところがあって、そのところにスポットライトがあって、表現する場というもの大切にされているということです。日本もこういうようなホールを作っているところがありますが、あまり使われていない。日本は表現力を重視しているという割に、どこで表現しているのだろうと。先生方にはちょっと失礼ですけれども。イギリスやドイツなどに行くと、こういう表現する場というのをすごく大切にしていると思います。

これはドイツの学校の教室風景で、健常児の中に全盲の子どもが入っていたりします。もう20年前で、日本も今は特別支援教育として変わってきたと思いますが、やはりイギリスとかヨーロッパは多民族国家なので、当たり前障がいを持っている子たちを入れているのですね。スペシャル・エデュケーション・ニーズ、SENという言い方をイギリスの場合にはしますが、結構、イギリスは学校の点数の評価というのが新聞なんかに出てくるくらい学校に対する評価がシビアです。そういうようなところで上位の学校でも、障がいを持っている子たちを当たり前に入れているのです。そういう子たちを入れると評価が低くなることはないですかと聞いたら、そんなことはありませんよと答えられたのが非常に印象的だったのですけど、障がいを持っている

子たちも当たり前前に学校に入れている。これは施設的な工夫なのですけれど、全盲の子たちにも大丈夫なように、これは助走をしてぼんと飛び跳ねるところですけれども、石とか何かの感触でその境目が分かるような工夫をしていたり、遊び道具もこれは音がいろいろ鳴るところがあって、そういうものを作って対応しています。今はもう日本でも珍しくないかもしれませんが、こういう施設設備を普通に健常児の学校でも当たり前前に整備していました。私は、ある学会で夢のある学校を紹介しろと言われて、新潟県の十日町小学校を紹介したのですけれど、これは県の特別支援学校の支部を市に移管して、この学校を作るときに障がいを持っている子どもたちと健常児と一緒に門から入る学校を考えたのですね。一緒に入るという工夫をするだけで何気に交流をしていて、子どもたちが、あの子たちと一緒にいるのはどうと親から聞かれると、何でそういうことを聞くのだと親に反発するくらい関係になっていて、交流が当たり前になっているのですね。日本も特別支援校教育というのが進んでいて、通級というのが積極的に行われるようになってきているのだけれど、そういう偏見が拭われていると思えないところもあるんですよ。

コミュニティ・スクールです。ちなみに、コミュニティ・スクールは仕組みの問題ですけど、これが甲斐市の双葉西小学校の一場面です。静岡県と山梨県の両方合わせて一番最初に作られたコミュニティ・スクールなのですけれども、コミュニティスクールを入れて何が変わったのですかと聞いて、先生方がおっしゃったのが、西小まつりという祭りがあるのですが、そこに来る人数が格段に多くなったという。東京のコミュニティ・スクールの実践でも同じことを聞くのですが例えば運動会に来る人たちが格段に多くなった。それはいいことなのですかと聞いたら、それはいいことですよ。特に東京なんかの場合には、その学校周りに住んでいる人たちは卒業生ではなく、ある意味他人ですよ。その人たちも結構来てくれることで他人の人たちが、「おらが学校」だという意識を持ってくれる。「おらが学校」という意識を持ってくれることが、多分、子どもの安全につながるのだという言い方をされていました。

ちょっと時間ありませんが、これはいろいろな施設は教育理念の具現化したものであるということを示しています。

私はオープンプラン・スクールというものを1970年代からずっと追っているのですけれども、この左側が少し見にくいと思うのですが、今までの学校の仕組みです。オープンプランスクールは、壁のない学校というのですけれども、子ども1人1人の個性を尊重するということを盛んに言っているのですね。それはある意味では、普通の学校、オープンプラン・スクールではない学校も当たり前前に学校の目標に書いているのだけれど、オープンプラン・スクールは、そういうものをあなたたちは目標で書いているけれど、そういう仕組みにしっかりなっているのかということをお問うたのです。学校の教授-学習組織は、オープンプラン・スクールの場合、大・中・小の弾力的な集団形成をするのだと。場合によっては、多様な交流を可能にするため無学年制にするのだとかね。今、教育改革で話題になっていますが、ティーム・ティーチングをしていくのだとかね。今まではこの左側の画一的な組織体制でいたものを、もう一度見直しているのですね。これは教育課程の問題でいうと、多様な個別学習教材、個別指導学習で、そこにパソコンがいろいろ入っていくのですけれど、今までは1人1人大切にすると言いながら、精神論だったのではないかと。先生方は確かにいろいろ能力はあって、先生方によっては一斉授業をやりながらも子どもの個性や主体性をそれなりにいかすということができるのだけれども、授業案を作って、スタートがあって最後終わるところは変わらないわけで、そこで取り残されたら、そのあとずっと取り残されてしまうということですね。そういうものを全部見直すというのが、オープンプラン・スクールなのです。これは言わずもがなですが、学校施設は、今までの固定的な教室構成ではだめで、こういう活動ができるような形で、やっぱり壁のない学校は必然的に必要なのだというのがオープンプラン・スクールですね。オープンプラン・スクールというのがすべていいわけではないの



ですけれども、でももう一度、こういう条件整備から考えていくと、またいろいろな捉え方ができるのかなと思います。

表 これまでの学校経営とオーブンプラン・スクールの学校経営

これまでの学校経営	オーブンプラン・スクールの学校経営
① 学校組織の改善	
固定的なクラス集団 →	大・中・小の弾力的な集団
画一的な生活集団 →	無学年制（多様な交流）
一人の担任 →	ティーム・ティーチング （複数の先生の担任）
② 教育課程の改善	
同一の内容・教科書中心 →	多様な個別学習教材
与えられた講座 →	講座選択制・課題研究
一斉進度学習 →	個別進度学習
（画一的なクラス・時間割）	（個別学習プログラム）
受動的学習 →	自主的学習（教師は学習を援助する）
③ 学校施設の改善	
固定的な教室構成 →	多様な教室・フレキシブルな
（4間×5間の教室）	学習空間
閉ざされた教室の集合 →	連続的で多目的な学習空間 （学校全体が学習・生活の場）
授業の場としての教室 →	多彩な学習環境
（机・椅子・黒板のみ）	（多様な教材・教具）

うまくまとまったかどうかわかりませんが、問題提起させていただきました。ありがとうございました。

では、武井先生、お願いします。

○検討委員（静岡大学教授 武井敦史） 堀井先生にまとめていただいたので、私からはヒントみたいなものをちょっと一言ぐらい言わせていただいただけにとどめたいと思います。

この施設の問題とか、学校の机の問題を考えるときに、ぜひ取り入れてほしいのが、時間スパンの感覚です。例えば、学校の配置であるとか、建物や何かを作ると、これは耐用年数からいって60年間から70年間の間は変わらないというふうに考えたらいいと思います。教育の中身や方向というのは、これから、今まで変わってきたペースよりもはるかに早いペースで変わっていくということが言われています。ただ、どう変わるかということは、ちょっと分からないというのが正直なところですね。そうすると、現時点において合理的な選択というのは何かというふうに考えたときに、言ってみれば変化に柔軟に対応できるようなつくりを持っておくということです。過去のことは言いやすいので、例えば、過去、パソコンルームみたいなものを一生懸命整備しても、GIGAスクールで1人1台端末になったら何のためにあるのかということになってしまう。大学では階段教室を持っていたらこれで講義がしやすいと言われていたけれども、確かに全体が見えても、今度は演習ができない。固定机になって演習ができなくなって、すごく使い勝手が悪くなって、時代に対応できなくなってくる。こういうことがこれからも起こる可能性があるのですね。それを100%無くすことは、これはできないと思うのですね。ただ、相対的に弊害を少なくするためには、できるだけシンプルに、それからできるだけ可変性が高く、そしてできるだけいろいろな形に柔軟に変化させることができるようなものを作って置く。これが、施設について

も、学校の制度面についても言えることだと思います。

今、議論していることは、いったい何年間くらいの寿命がある議論なのかということ、常に念頭に置きながら議論するのが、これからの議論についてはいいかなと思います。私からは以上です。

○委員長（常葉大学教授 堀井啓幸） ありがとうございます。時間軸でいろいろなことを考えていくという視点ですね。今日、委員の皆さんから、あるいはグループワークの中で出てきた御意見というのは、こういう方向で委員の皆様が考えてくださったのだなということが確認できました。今日はどうもありがとうございました。

○司会（教育総務課長 高田和幸） 事務局からの連絡として、坂本係長いいですか。連絡事項を伝えてください。

○教育総務課係長（坂本浩長） 最後に連絡をさせていただきます。委員長からもありましたが、今年度のテーマ別の協議ということは、今回で一応、一区切りということになりますが、最初にお渡しした資料の説明でもお話をいただいたスケジュールのタブの表のとおり、令和4年度以降につきましても行動計画は続いていきまして、簡単に説明させていただきますと、6月を目途にこの検討委員会が出た意見を踏まえて、これから市民のほうへ出ていくということで、検討会の中ではこんな意見が出ましたというようなものを、外に向けて提示をしていき、併せてホームページ、インターネットでも情報の発信をしていきたいと考えています。そういったものを経まして、市の教育委員会としての、先ほど武井先生からありましたが、現時点の、今の目線での再編計画、題名をどうするかはちょっとまだ分かりませんが、再編計画の素案というようなものを教育委員会として作っていきます。行政ですので、議会の手続等もありますので、議会へ報告を行い、それから最後の段階で整えた形でパブリックコメントを行っていきます。最終的に諸々を吸った形での再編計画を出していければということを考えております。

こういった中で、委員の皆様については最初にお願いしましたとおり、来年度も引き続きメンバーということでお願いをしていきます。今、言った場面でどういうことをしていただくかについては、またその都度、御相談をさせていただきますので、よろしく申し上げます。

それから、前回の会議録を事前に送ってありますが、特段、すべての委員さんから訂正等はありませんでしたので、インターネットに公開させていただきます。私からの連絡は以上です。引き続きよろしくお願いいたします。

○司会（教育総務課長 高田和幸） ありがとうございます。委員の皆様には、来年度も引き続き御参加いただきたいということで、よろしくお願いいたします。と言っている私については、今月いっぱい退職です。この会に参加できなくて非常に残念ですが、皆さんに今後の検討委員会をとおして計画の策定のお手伝いをお願いしたいと思います。

#### 4 閉 会

○司会（教育総務課長 高田和幸） それでは第4回の再編検討委員会をこれで終了します。最後に互礼を交わしたいと思いますので御起立ください。ありがとうございました。

[相互に礼]